

## 大隈言道研究

## 年譜編第Ⅱ部

進藤 康子

にはかにもながるゝ水のうれしきはゆきかふ魚と我となりけり  
うかりつる心やり水ながるればかなしきことのある身ともなし

「ささのや集」『大隈言道傳』

天保十四年五月廿四日にさゝのやの翁のつまぎみ うせられ  
て七日にあたるひに

なき人のわすれがたみもしのばれて手向に折れるなでしこの花

『向稜集』

●歌論『ひとりごち』成立か。

○この頃『差都貴帖』二成る。(波多野幸彦氏蔵)言道自筆歌集、大  
本一冊。真字書二七首

弘化元年 甲辰(1844) 四七歳

○妻の死後、言道は体調を崩し病に伏していた。門下生中村石环か  
ら、言道は見舞いの梅を一枝送られたたことなどが、次の長歌から  
わかる。

ことしとしのはじめよりいとわづらひてふせりてのみありけ  
るに、中村石环のもとよりうめの花のいとをかしきを見せけ  
るに

かすみ立はるべになればのに山にうめこそにほへ

たがさともさかりときけどそのふにも

にほふといへどふせる身はかをだにかがず

よもすがらなげきあかせるしきたへの

枕がもとにこころありて人の見せける梅のはな

ただこのはるはこのひとえのみ<sup>三</sup>

『甲辰集』『大隈言道家集』

おなじ時さくらの枝を人のえさせければ

てにとればしぬるいのちもいきぬべき此一枝の山ざくらかな<sup>四</sup>

『甲辰集』『大隈言道家集』

○『甲辰集』成立か。『大隈言道家集』の中に、『甲辰集』から選出された歌郡が収録されている。『甲辰集』の抄の末尾に言道の注記が「右甲辰集撰出八百八十八ノ中」、また、『壬生集』の最後の注記にも、「甲辰集弘化元年ヨリ嘉永元年迄五年ノ集ナリ」とある。

弘化二年 乙巳 (1845) 四八歳

○十二月二十三日『乙巳集』<sup>五</sup>成る。言道自筆歌集。二百十三首。卷子本。佐伯常貞に贈る。

言道の妻の死後から二年間に詠出した歌を集めたもので、『甲辰集』と重なるうたが十九首ある。『こそこのちり』を練り直し『ひとりごち』を完成させていった頃と重なる。つまり、自分の歌風を確立していった時期の歌集である。奥書を次に記す。

ひのくれゆくまゝによくもみえずいまだかく  
べきうたもあれどあやまりぬることのみ  
なるべければよからぬうたをわづらはしく  
さのみはとてかいさし侍る。そも／＼この巻は  
おのれをとゝしの冬より二とせばかりの  
まよみいでつるうたなるを、かゝるものにかい  
のこしなむは、ゆくすゑまでの人わらへなるべ  
けれど、こはるゝまゝにかくはものしつるなり。  
たゝまなびのしるべにとてまゐらすのみ  
なりけり 弘化二年十二月廿三日

佐伯常貞ぬし

大隈言道

◇野村貞貫、もと(望東尼)夫妻、向の稜(平尾山荘)に隠棲する。

嘉永元年 戊申 (1848) 五一歳

◇八月二十九日、言道の母(刀工信国又左衛門光昌女)没。七九歳。香正寺に葬る。法名、残岳院妙照日秋信女。

◇十二月二五日、言道の弟、清右衛門言則没。四九歳。法名、古竹有声行年四九。妻は博多川端町山端久作女。『清原姓大隈氏系譜』  
●『田家集』(政所氏蔵)六十首、言道自筆歌集。

嘉永二年 己酉 (1849) 五二歳

●この頃からまとゐ<sup>ハ</sup>や、もとゐ<sup>セ</sup>がはじまり、門下生とともに、しばしば歌会を催したことが、野村望東(望東尼)や、言道の歌集からわかる。まず望東尼『向稜集』などから、その事例を引用する。

はつはるの、うたあはせによめるうた 『向稜集』

さゝのやの翁(言道)きたれけるひに

さくらばなちるたびごとにかなればきみはこぬやといひつゝぞ  
見し 『向稜集』

平尾なる山のたかねの松のもとゐしたるとき、言道翁、にゆるゆも松のおとたてつなり、とかいつけていだされければ  
このもとのおちばかきよせ火をたけば(ママ) 『向稜集』

このひ明石ゆきとしぬしがいへに、翁をはじめかれこれつど  
ひせらるゝに、おのれにもなどありしを、ぬひものゝいそぐ  
ことありとて、得ゆかざりしかば、そのことゝもいひやるつ  
ひでに

おにやらふこゑもきこえぬやまさとはまたきにはるのたつとしも  
なし 『向稜集』

つごもりにとしをしむわざせん、とて翁などきたられしかば、  
さま／＼ものかきわざともするをりから、たねこがきぬのそ  
での白きゝぬをこし、これに何かゝいつけてよとありしかば、  
竹をかきて

いたづらにまたひとゝせもくれたけのよはいのふしのかずのみぞ  
つむ 『向稜集』

八月うたあはせに、雲間名月といふ題に

中ぞらのくもまに見えしかげのみや月のさかりのしるしならまし

『向稜集』

としのくれ

かたりあひてとしのくるゝをゝしむまに春のまとゐにならむとす  
らむ 『己酉集』(『大隈言道家集』)

○二月十二日、上座郡上寺村の教念寺において祖先大隈主水助治言の二百五十年の法要を催す。言道は病気のため欠席したことが『甲辰集』の詞書に書かれている。

酉二月十二日、上寺村元祖大隈主水助治言二百五十回同村教念寺にて法事執行しけるに、則此寺主水開基にて代々子孫なれば、住僧よりいひ遣しけるに、このごろ病ひにてえいかずうちむれて玉まつりする人かずにこころばかりはいらむとぞおもふ 『甲辰集』(『大隈言道家集』)

◇田代正良<sup>ハ</sup>は藩主黒田長溥に従つて江戸へ。祐筆として勤める。

○言道の初孫、鉄之丞<sup>九</sup>が生まれたのはこのころか。毎日百首以上歌を読んでいた言道も、『大隈言道傳』によると、あまりのうれしさに孫に気を取られ、この日ばかりは、六十首しか詠めなかったという。其の時の歌。

初春にいだきそめたるをのこ孫わがてのうちの玉ぞこの玉

『大隈言道家集』

○『己酉集』(所在不明)『大隈言道家集』に其の一部が収録されており、末尾に「右己酉集五百六十七首ノ中」とあり、『己酉集』は五百六十七首であった。

嘉永三年 庚戌(1850) 五三歳

○言道門下歌会まとゐ。

花まだしきころ馴花亭にて人々うたよみける時、花下といふ

ことを桜のもとにして

たゝひとへさくを待得ておのがどちはなのもとゐをけふはじむ也  
このもとに多ひぬる人のありさまを見てだに花も猶わらひなむ

もりさだぬしがいへの糸さくらの花見にゆきしに、まるふど  
あまたいたりたきりしかば、ゆきとしぬしが庭なる柳のかげに  
まとゐしてよめる

よの人に花のこのもとといとられて柳のかげにまとゐするかな

『向稜集』

○『庚戌集』(所在不明)『大隈言道家集』に其の一部が収録されており、末尾に「右庚戌集七百六十六首ノ内」とあり、『庚戌集』は七百六十六首であった。

嘉永四年 辛亥(1851) 五四歳

●言道の月次歌会開始の明確な提言があったことが次からわかる。

嘉永四年のはるのはじめ

老そふるとしをねしまにかさねてもけさのねぎめのこゝちよきかな  
正月つごもりにさゝのやに行きける時、けふをはじめとして  
月ごとにをしむまとゐをせむと翁のいはれければ、みなをか  
しとて、よふくるまでまとゐをして

くれはつるはるのはてにはあらねどもまづ一月をゝしむよはかな  
きさらぎのつごもりれいのまとゐをして

『向稜集』

○初夏、『春野集』(小林本)成る、一七一首。言道自筆歌集。

小林重治<sup>二</sup>に贈る。奥書から、この「小林本」は、十一年前、天保十一年成立の「谷川本」を下敷きしている事がわかる。ほとんど内容を変えずに、『春野集』を何回も書き贈っており、言道のこの集に対する完成度の高さへの自信と特別な愛着をみる。

嘉永五年 壬子 (1852) 五五歳

○『壬子集』(所在不明)

『大隈言道家集』に其の一部が収録されており、末尾に「壬子集六百四十二首ノ内」とあり、『壬子集』は六百四十二首であった。また、「己上九年ノウタ凡一萬首余ソノウチヨリ此一冊トナルコノマエツカタ若年ヨリノウタ南楼集ササノ屋集アリ」と、言道の注記があることから、『南楼集』『ささのや集』の存在していた事が知られるが、現在においては、所在不明である。

嘉永六年 癸丑 (1853) 五六歳

○吉井町への旅。この旅に関する言道書簡を次にみる事ができる

御宅を立候て秋月あまぎ屋に折角御添書被下候へ共(中略)□  
□ぬし方に四、五日滞在いたしそれより吉井に参り候処、これはかのかたに一兩人知人も有之、ここにはまた長滞に相成申候  
久留米 田代よりも参り候様申来候へ友 長旅につき まづ志  
波の方に引取 それより朝日を経て 一昨二十五日帰宅仕候  
梅野満雄『大隈言道傳』

志波や吉井は 言道の祖先のゆかりの町で、久留米や田代の門人宅に行く時は、幾度か立ち寄ったものとおもわれる。

嘉永七年(安政元年十一月二七日改元) 甲寅(1854) 五七歳

◇一月『鴨川五郎集』三(長沢伴雄編)刊。言道の弟子達の歌が、一六八首入集。

○二月、『嘉永七年詠草』(福岡市博物館蔵)二百十二首。言道詠草。(現在、言道自筆詠草とされているが、なめらかで美しい筆跡からしても、言道の手とは少し違っている。手元の資料と照らし合わせると、高弟の野村望東尼の手による筆録ではないかと思われる。こ

の詠草の奥書には、和歌を志す初学の人々への、言道の理念を窺い知ることができるので、次に挙げる。

(前略)わがむそぢゝかきにいたりて、うひ学びのわさぎは、かのひぐれ道とほくならめど、まことおくれでたる身はいかゝはせむ。そも今しばらくながらへてあらば、またかたはしづゝよみうるうたもあらましとて、たゝ詞の自在をまなびて わがこゝろのまゝにいひならひなましかばと思ふばかりのねがひになむ(中略)詞の自在におのが心をゆかめず、あらたにいはんこといかゝなる人かやすらかむ、つたなきうたなれどそのこゝろをしれらむ人は、わがつたなきうたもさ計はわらはじかし  
嘉永七年寅二月

大隈言道 谷川幹辰ぬしに

●『仲秋の巻一』三(九州大学図書館蔵)言道門下集、言道浄書。

●『中秋之巻二』(大山家蔵)言道門下歌集。(所在不明)

●『葉月左之巻三卷合撰』(福岡市立博物館)言道門下歌集。  
この紙背の書き入れに「甲辰 もと子」とある。

●『葉月左之巻一』『葉月左之巻二』『葉月左之巻三』(所在不明)言道門下歌集。

●『霜月之巻一二三合撰』(福岡市立博物館)言道門下歌集。

●この紙背の書き入れに「甲辰 石玕」とある。  
●『霜月之巻一』『霜月之巻二』『霜月之巻三』(所在不明)言道門下歌集。

安政二年 乙卯 (1855) 五八歳

○八月一日、『文月の巻』成る。言道自筆詠草。奥書には言道の門下歌会をはじめた十数年前のころの回想が綴られている。

歌まきをつくりて人の歌のよしあしをいふこと、はたちあまり二とせ三とせにやなるらむ。其の久しきにたえず物したるもあり、また、たえてものせぬ人もあり。はた世をさりたるもあり。なからよりよみはじめたるも、ちかきもあれど、おのが教のおろかなるには、おもしろき歌などあはれなるなど詠み出でて、師ははだしなどいふ俚言にたがはず、嬉しとも嬉し。そもそもおのれがつたなきのみにあらず。むかしの歌の歌まねのみにて、いづれも今まで年ふることいと久しければ、後の世に笑われなむものから、やおらかくまでなしたるは、むげにいひそしるべきにあらず。猶すたれたるわざならめど、たけたる人よく見わかちてこの道いやましくさく花のごと、世に傳はれかし  
安政二年八月一日 大隈言道しるす

『詠草 文月の巻 奥書』『大隈言道翁傳』

○この頃の暮『講歌集』<sup>二</sup>成る。野村望東自筆歌集(穴山健氏蔵)

言道門下生達、盛んに歌巻を作る。『講歌集』により、その言道門下歌会における言道の指導の様子を詳しく知ることができる。言道の講評を望東が書き留めたものであり、言道の講評は、未知の事跡の一部を埋める好資料(穴山氏)で、望東尼『向稜集』に採られていない、若き日の野村もとの歌がある。

初冬のうたあはせの中に

かれる田のくろにもふせるそほつ哉もるわさはてしこゝろやすさに

十二月うたあはせによめる中にて

ゆきゝゆる枝よりうめのはな見えてあさひかゝやくつゆのしら玉 『向稜集』

安政 三年 丙辰 (1856) 五九歳

○言道門下の歌会まとゐの実情を次に挙げる。

正月うたあはせに 安政三 梅

ともしびのかげうごかしてまどのとのすきまの風にかよふうめ

が、 『向稜集』

ねまちばかりによひのまくもりければ、みなふしたりしに、あかつきの月はいかに／＼と、戸をたゝくこゑをきけば、さゝのやの翁のおどろかさるゝなりけり。貞貫君もよろこびていそぎとをあげ見るに、月いとよし。やがてあかつきの月はいかにとたゝくとにはれたるそらをねやしりつる

蚊やどもまくりのけて、酒さかなやうのものとりいでつゝものがたるうち、あけはなるゝそらことにきよし、山のはいづる日かげもまためづらし  
ありあけの月見ながらにさゝぬとをさしていりくるあさひかげかな 『向稜集』

神無月九日庭の紅葉の盛りなりければ、さゝのやの翁をはじめかれこれとゐして、さま／＼のうたよみける中にしたばよりまたうらばより秋萩のこゝろ／＼のうす紅葉かなあるじゝてもみち見るひはよそになくたづかねさへぞおのがものなる

このよしくれのいたくふりければ、人々こゝにとまりけるに翁はあかつきよりひごとに歌三十あまりもよめば、あけはてぬまにかへらむ、などいはるゝまゝ、すゝり箱紙など枕べにおきて、こゝにてよみ玉へ、などいひおきてねたりしに、あさいしたるほどゝくかへら(れ)けるをしらで、そのあとにて、みぎのかみを見るにひとつだにけしきばみたるすぢもなく、けさもきのふの老のしらかみ、とあければ、かへしにとておなじことを  
一葉だにもみぢもちれるけしきなくけさもきのふのまゝのくれなゐ 『向稜集』

さゝのやの翁のとしごとにいひづかに行て、春をくらしつてのみ帰らるれば、ことしもさもやとていひつかはしけるはるごとくにきみをとゝむるいひづかのさとのさくらはきりもすてゝむ 『向稜集』

安政 四年 丁巳 (1857) 六十歳

○八月、『陸田雑歌』成る。(福岡県立図書館紙焼) 言道自筆歌集。六五首。

○八月十五日、言道、大坂へ向かうため福岡を発つ。

『ひとりごち』を真藤利明<sup>二五</sup>に与える。

『ひとりごち』の末尾に、

「此巻は 我師大隈言道大人の大坂に登らする時 生かたみとして奉書紙に歌六十首と源氏年立三巻を贈らるるに添へ給へる也 利明」と、真藤利明の自筆による書き入れがある。

この書き入れには安政四年八月一日との記載があるため『ひとりごち』の成立がこのころだとする論がいくつか生まれてしまったのであるが、実は『ひとりごち』に書かれている「天保の民は天保に生きたとわかる歌を歌うべきだ」との内容から判断して、書かれた年代は安政年間ではなく、天保年間であり得る。加えて、言道の娘が嫁ぐ折にはすでに完成し、嫁入り本として持参させた経緯がある。

次に、野村望東尼『向稜集』の左の一文をみると、言道が大坂へ向かう時の別れを惜しむ様子が和歌を織り込みながら、情感が切々と描かれている。

安政三己午<sup>二六</sup>のとしの八月十五日に大隈言道うしの都にのぼらんと、にはかに思ひたゝれければ、とゝむべきことにもあらず、わりなくわかれます、とておなじく六日に、わがいはりにむかへける時  
わがこゝろいへばかすなりおもはなむよしおもはでもたえてしのばん

さてそのひになれば、かしこに行ておくりすとて  
たひらかに帰りますませといふまにもわがいのちさへかつおもふかな

千代の松原までおくらむといでたちけるにあるかたにより玉ひければ、石秀<sup>二七</sup>はそなたにくしゆく素行<sup>二八</sup>ぬしとふたり、かの松原先に行て待ける間に

都よりきみかへりくとまつばらにかくてありなばいかたのしきやをらまち得てふたまたせ<sup>二九</sup>のはしまでみなしたひゆけばそこまでいたりてわかるとて

きみとわがうみ山遠くへだつとも月はかたみに見るべかりけり

都にいであゝれてのち芦屋のみなどに舟まちて、かしこにて

あきもくれゆくまでいであゝでなどきゝし時よみておくらんとて

なにはえにゆくともゆかぬかりふしはよしやあしやとおもひこそ

やれ 『向稜集』

これらの場面に関しては、拙稿「野村望東尼『雑歌草稿二』『向稜集』との関連において(続)」『文献探究』(45)2007-03、同拙稿「望東尼『みのとしうまのとし』—『向稜集』との関連において(下)」『文献探究』(44)2006-03 で、詳しく述べている。

○十月、大阪に着く。中ノ島にある筑前藩の蔵屋敷に暫し滞在する。当時藩の勘定奉行は言道の弟子である生田久繁で、大坂の銀主方とも交際があった。生田はおりしも大坂詰方中となっていたので、蔵屋敷に寄寓する事が出来と由が『大隈言道傳』で知る事ができる。

○十一月、中ノ島の洲崎梅壇の木橋第二楼に住む。その居を観水居と称し、鳧居室と名付けたという、その当時の言道の手紙を数通、特に筑紫いそ子に当てた手紙を辿ると、大坂での生活がはじまり、想像以上に苦勞している様子が彷彿とされる。

こゝに参りし時は、御屋敷はいと物せはしくて、片時たえず侍りしかば(中略)また家をかへ侍りて、今の処いと狭くきたなけれど、大工などものして、たてぐ畳などそれこれとするに、萬の調度一つたらずは、家もつこと能はず。此ほど常興<sup>三〇</sup>。まありて、朝よひの見ぐるしきおのれが手助かりにはなり侍れどすり鉢すりこぎなども未だ侍らず。

これにて事のたらはで、よろづさばけぬをしるしめすべし。さはいへいとこころやすく人のさまにならぬこころよき、今はいとよくありつき侍りてなむ にはは橋 天神橋 天満橋 中の

島の長橋を三つ合わせたらむやうなる大橋を はるか望む川端にて かわは淀川となる川口にて いと景よろしき故 今は命ものぶばかりなるを あまりに知る人多くなりて、騒がしけれど世渡りぐさのよすがなれば、すべなくかかづらひ侍る

言道の高弟、野阪常興は、自らも上坂し、言道の生活の細かな手伝いをした。また、福岡を立つ前に『ひとりごち』を与えた真藤利明へは、十二月五日付けで次に見る。

唯自由之宜而已にて風がなる事はさらに無御座 ただ名利の地に御座候 まばらに人の頼み候物など書揮いたし候ばかりにて万葉仮字もよめ不申候位之土地に而 万事御察可被下候 春は上京いたし 嵐山 吉野 また早春には月の瀬の梅十五村を尋可申と存罷在り候 大坂は筑前よりも人氣鈍く 一体山遠くして雨ふるもやう 雪もさのみはふらず星のギラツク夜天もなく人情平らか也 まこと難波わたりの春野けしきを讀めることなり(中略) わたくし事も歌には退屈なし。人情のシマリには困り申候(後略)

「人の頼み候物など書揮いたし候ばかりにて 万葉仮字もよめ不申候位之土地に而」と言道のプライドがここまで言わしめたのか。ある人から歌を頼まれたので、我が歌を、万葉仮名でわざわざ書いてあげたのに、その仮名が読めないとは。大坂人の程度はそれぐらいの土地柄だと強がっている。しかしながら「人氣鈍く」、「人情のシマリには困り申候」に於いては、なかなか人氣が出ない、大坂人の輪に入っていない、なじめない実情を書き記している。

●言道書簡(十一月二九日付)

さて、もう一通は、佐々木信綱、梅野満雄は「宛名がわからないが」としている手紙。梅野満雄は、手紙の中盤のみ抜粋し、前半と後半部分を省いて検証している。しかしながら、このたび九州大学にある原翰をみると、左の翻字で示した「小林重治ぬし」如く、実は、飯塚の門下生小林重治宛であり、十一月二九日の日付が在る。書簡の全部に目を通してはじめて、異邦人として馴れない土地で、

大坂人に抱いた特別な言道の印象を知ることが出来る。それを愛弟子小林重治に次の様に書いた。<sup>三</sup>

わたくし無異今程梅檀木橋第二楼中の島のすさき鳧居室と号し申し候：唯閑静を宗として独居毎日鍋一つのかしぎ 主従一人<sup>三</sup>……<sup>三</sup>もと弟子新社中見候処 爰は愚の愚 黄面先生の弥陀のみ道人たちゆる其の方黄金の山わたくし住居の向ひ かしまや雁治 日本第一の金のかたまり御座候 一つも羨ましからず……歌詠みは熊谷<sup>三</sup> 萩原<sup>三</sup> 遠行いたし候につき名家もなく(後略)

言道

小林重治ぬし

十一月廿九日

右の手紙より、「唯閑静を宗として独居 毎日鍋一つのかしぎ主従一人」といったつましい生活をしていた言道は「わたくし住居の向ひ かしまや雁治 日本一の金のかたまり御座候。一つも羨ましからず」と強気な発言をされており、言道の本音が伺われる。金持ちをあからさまに非難するようなことはかつて言道にはみられなかった。しかし、大坂での生活に慣れてくると、生活のためには、かえって金持ちの太鼓持ちと成り、金持ちに取り入るような歌があるかと思えば、その一方で、言道は、当時の歌壇文壇で高名な熊谷直好や萩原広道らとの交わりもあり、文人との交流の輪が広がる。難波において万葉仮名で書かれた言道の歌。視覚的味わいをも加味した四十三首である。言道は生活のために、我うたを万葉仮名にして、求める人に与えた。しかし大坂人はなかなか「万葉仮名もよめず」と不満をもらしている。

●『安政丁巳中冬 大隈言道漫書軸』(桑原氏所蔵) 言道自筆。

四三首。真字書。

1・東望為波野辺能霞能我可楽等可々気而見数流高宮能郷

(ともすればのべのかすみわれからとかかけてみするたかみやのさと)

2・故郷脳坂井之清水吾計来而今日乎月耳叙志流

- (ふるさとのいたみのしみづわればかりきたりてけふをつきの  
みぞしる)
- 3・音裳不為而吾門能戸耳何時從耶在明能月之影者照在  
(おともせでわがかどのとにいつよりやありあけのつきのかげ  
はてらせる)
- 4・釀置之吾而製裳未鋪耳保古樓日出壺能煤哉  
(かみおきしわがてづくりもまだしきにほころびいづるつぼの  
うめかな)
- 5・少女等稻籬庵能戸耳招而立在華薄哉  
(をとめらがいねおひこむるいほのとにまねきてたてるはなす  
すきかな)
- 6・月觀乍深世流我乎寢覺子弟未寢耶等人等波麗敬利  
(つきみつつかせるわれをねざめていまだねざやとひとと  
はれけり)
- 7・貴樂麗都流事裳得不知爪木副木芽春耳者逢古々遅可難  
(きられつることもえしらずつまささへこのめはるにはあふこ  
こちかな)
- 8・塵掃者清真砂裳副來而未耳成為善裳惡裳  
(ちりはげばきよきまさごもさそひきてひとつになせるよきも  
わるきも)
- 9・怜月指入流妻戸從無理出夕煙哉  
(おもしろくつきさしいるるつまどよりわりなくいづるゆふけ  
ぶりかな)
- 10・儼川能汀能鴨能等望年夫理置並多留物等見二手  
(なのかわのみぎはのかものともねぶりおきならべたるものと  
みるまで)
- 11・唯一立者皆立朋千鳥佐手社思等知耳者在敬礼  
(ただひとつたてばみなたつともちどりさてこそおもひどちに  
はありけれ)
- 12・棟棠能雫枝耳裳為可理不得手流蛙鳴耳耶有樂務  
(やまぶきのしづくえだにもすがりえでながるるかはずなくに  
やあるらむ)
- 13・打集而佐耳鳴而者百千鳥何能声毛聞和可冥國  
(うちむれてさのみなきてはももちどりいづれのこゑもききわ  
かなくに)
- 14・耶摩郷能柱那麗耶立乍松乎籠而裳家乎造作在  
(やまさとはしらなれやたちながらまつをこめてもいへをつ  
くれる)
- 15・朝旦積在雪乎湯耳焚而溪能清水裳不汲比可難  
(あさなあさなつもれるゆきをゆにたきてたにのしみづもくま  
ぬころかな)
- 16・田面從吾門指而來人能近着奴問爾誰等新樂者也  
(たのもよりわがかどさしてくるひとのちかづかぬまにたれと  
しらばや)
- 17・無果御世腦長裳不知子弟広執顔耳步行尺獲  
(はてもなきみよのながさもしらずしてひろとりがほにあゆむ  
しやくとり)
- 18・道能辺耳脱捨良麗之藁履能上谷清積留白雪  
(みちのべにぬぎすてられしわらぐつのうへだにきよくつもる  
しらゆき)
- 19・馴奴麗婆耶我弟憂可樂奴方裳那之不栖伝住卷欲貴山里  
(なれぬればやがてうからぬかたもなしすまですままくほしき  
やまざと)
- 20・華見二等何時耶往敬務人那樂武帰乎見而叙驚可麗奴流  
(はなみにといつやゆきけむひとならむかへるをみてぞおどろ  
かれぬる)
- 21・傾而吾隱所能伏庵乎見入顔耳母照月影  
(かたぶきてわがこもりどのふせいほをみいれがほにもてらす  
つきかげ)
- 22・爰左右手裳夜半耳者波能打寄而松耳懸有塵芥可難  
(ここまでもよはにはなみのうちよせてまつにかけたるちりあ  
くたかな)
- 23・珂怜古々地為者耶作樂花散所米之從止時能無  
(おもしろきこちすればやさくらばなちりそめしとりやむと  
きのなき)
- 24・我期東九酒耳醉樂詩音立而拍者拍手乎真似留山彦  
(わがごとくさけにゑふらしおとたててうてばうつてをまぬる  
やまびこ)
- 25・月花耳向日而耳裳在狙乎顧為者憂世也希理  
(つきはなにむかへてのみもあらしをかへりみすれはうきよ



- 26 ・誰枝者折之等雖場作樂不答華能色叙可南之幾  
（たがえだはをりしといへばにはさくらこたへぬはなのいろぞ  
かなしき）
- 27 ・所狭隣々乎隔有世能中蓄能務都可之氣成  
（ところせくとなりとなりをへだてたるよのながぎのむつか  
しげなる）
- 28 ・誘往力都可麗而散花乎流水耳讓山風  
（さそひゆくちからつかれてちるはなをながるるみづにゆづる  
やまかせ）
- 29 ・春來者吾臥庵能内二手裳行通蝶能以久樂等母難之  
（はるくればわがふせいほのうちまでもゆきかふてふのいくら  
ともなし）
- 30 ・往方者松場原杉原雖隔何等裳無耳和多留白雲  
（ゆくかたはひばらすぎはらへだつれどなにもなしにわたる  
しらくも）
- 31 ・往方者志多比見乍帰雁止難久裳睡留老哉  
（ゆくかたはしたひみながらかへるかりとどめがたくもねぶる  
おいかな）
- 32 ・末東樓目者寄副庵能柱共一樹能花能心地古所為礼  
（まどろめばよりそふいほのはしらさへひときのはなのここと  
こそすれ）
- 33 ・唯一庭耳落在松能実能更耳母不落暮今日哉  
（ただひとつにはにおちたるまつのみさらにもおちずくるる  
けふかな）
- 34 ・等裳為者散往花乎贈來而蝶副蝶等誤來  
（ともすればちりゆくはなをおくりきててふさへてふとあやま  
たりけり）
- 35 ・間近等念者近之久樂暗耳乱手所見海人能漁火  
（まぢかしとおもへばちかしくらやみにみだれてみゆるあまの  
いさりび）
- 36 ・寂寥三二掌乎耳組而在物乎小草者露之玉乎持來  
（さびしさにてをのもくみてあるものををぐさはつゆのたまを  
もちけり）
- 37 ・伏庵能與二手塵裳掃在乎佐耳者以樂伝去留月影

- 38 ・終夜吹西軒能松風能不所聞計今朝者所聞  
（よもすがらふきにしのきのまつかぜのきこえぬばかりけさは  
きこえぬ）
  - 39 ・如索撓在山路觀和多世者其期東句行吾心可南  
（つなのごとたわめるやまぢみわたせばそのごとくいくわがこ  
ころかな）
  - 40 ・戸指管出而不見者也安耶十八耳籠在庵乎照數月影  
（とざしついでてみねばやあやにくにこもれるいほをてらす  
つきかげ）
  - 41 ・薺能開花愛耳被棄而残在庵能燈影  
（あさがほのさくはなめでにすてられてのこれるいほのともし  
びのかげ）
  - 42 ・人影裳無而寒氣寸大路哉往方遠久月者雖為照  
（ひとかげもなくさむけきおほぢかなゆくかたとほくつきは  
てらせど）
  - 43 ・翡翠能水耳落入音谷裳今日者不所聞人裳不訪而  
（かはせみのみずにおちいるおとだにもけふはきこえずひと  
とはずて）
- 安政丁巳中冬 大隈言道漫書

校註

- 一 自筆稿本は平岡良助所蔵。『大隈言道』佐佐木信綱・梅野満雄共著
- 二 波多野幸彦氏が「近代書道グラフ」5号（1963）に「大隈言道と  
蓮月尼」の特集を組み紹介。
- 三 言道は心身ともに疲れ果てていた時期、門下生達が見舞い支えた。
- 四 右同。

五 穴山健二翻刻大言道自筆『乙巳集』福岡女子短大紀要43(1992)

六 歌の会合。校註一三参照。

七 言道独特の表現。木のもとでの歌の会合まとめをする。

八 言道の二女うめの婿で養子

九 言道の二女うめの長男。

一〇 春日政治氏の「春野集を見る」『能古』昭和五年八月。のちに『春日政治著作集』第八卷(昭和六十年十二月)において、一部を紹介。また、山本嘉将「大隈言道 春野集」昭和39年九月(和歌文学会配り本)で全容がわかった。(春野集小林本太田富子氏蔵)

一一 飯塚での言道の門人。『草径集』上梓の折にはかなりの援助をした。言道の序を伴う歌集『豊後の道の記』、『自詠集中抄』などがある。

進藤康子「大隈言道自筆資料」自詠集中抄『小林重治家集』(九州情報大  
学研究論集)十号(2008)参照。

一二 『類題和歌鴨川集』長沢伴雄撰。初編は嘉永元年、二編「次郎集」は同三年、三編「三郎集」は同四年、四編「四郎集」は同五年、五編「五郎集」は同七年に出版。総歌数一万千首。紀州藩士であったが、獄中で自刀したので第五編で終わった。

一三 進藤康子『言道の月次歌会「まとめ」をめぐって―付翻刻九大本  
『仲秋巻一』「香椎湯」第四二二号

進藤康子「野村望東尼『雑歌草稿二』―『向陵集』との関連において  
(續)『文獻探究』四五号

進藤康子「望東尼『みのとしうまのとし』―『向陵集』との関連にお  
いて(下)『文獻探究』四四号参照。

一四 有明高専十八号「翻刻 野村望東自筆『講歌集』」穴山健翻刻。

一五 福岡今泉の人。登とも称す。無足組。廃藩後大宰府の神官となる。  
明治四三年没。八二歳。

一六 「己午」は安政四年であり、言道の出立も安政四年である事から  
望東の書き間違いと思われる。安政三年と明記した項が数丁前にある。

一七 言道門下。望東尼の歌友。

一八 四宮素行、琢蔵。言道門下。望東尼の縁者で彼女は我が子の様に  
かわいがった。

一九 福岡市博多区二股瀬

二〇 野阪豊次郎常興。言道の高弟。『類題鴨川五郎集』に入集。

二一 次号にて付す。

二二 高弟野阪常興が福岡から上坂し、暫く言道の身の回りの世話をし  
た。

二三 熊谷直好。通称八十八。桂園門下。桂門十哲の一人。『古今集正

義序注追考』『浦の汐貝』等著す。文久二年没。八一歳。

二四 萩原広道。江戸後期の国学者。号は蒜園(にらその)。備前の人。  
本居宣長に私淑し、大國隆正に師事。著「源氏物語評釈」「本学提綱」  
など。文久三年没、四八歳。